Bulletin of the Faculty of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1988, Vol. 35, 179-188.

登校拒否に関する研究（第Ⅲ報）*

——女子における治療契機としての女性性受容——

池田博和　石川雅健[1)]　長谷川博一[2)]
加藤礼子[3)]　東浦昇子[4)]　平石賢二[5)]
桐山雅子[1)]　川瀬正裕[1)]　辻井正次[6)]

Ⅰ．はじめに

登校拒否の実態について，若林ら（1986）は児童よりも特に中学生，高校生年代の症例が際立って多いことを示し，さらに高木（1984）は最近の傾向のひとつとして，女子例の増加を挙げている。

この点，第Ⅰ報（池田ほか，1987）でのわれわれの心理教育相談室における最近の登校拒否に関する調査においても，同様な傾向がみられた。

その背景としてはそもそも，思春期，青年期が疾風怒濤の時期といわれるように激変期であり，児童期と青年期後期あるいは成年期の，つまりは子どもと大人の中間でそのいずれでもない過度期であることがあげられる。さらにこの期が，自立と依存のアンビバレントな状態であり，過敏性が高く，身体的にも性的成熟の時期であることが，多大に影響していると考えられる。

また，女子例の増加に関していえば，その背景の一因としては，今日の教育状況にあっては，達成的側面，とりわけ成績による評価や順位づけがきわめて重要な意味をもち，性別にもとづく人格形成などといった側面についてはほとんど顧みられなくなっているため，基本的に「性差」が重要性を失し，本来，男子に多かった登校拒否に関しても次第に男女差が小さくなってきているものと思われる。

しかしながら，同じ登校拒否といっても，男子と女子の間では，その質的な性格，すなわち症状や経過の具体的なありようについてはかなりの相違がみられることも事実である。

そこで，本論では青年期女子に焦点を当て，青年期登校拒否における女子特異性の問題について検討することにしたい。

Ⅱ．事例の概要

1．事例1：咲子　13歳　中学一年（受理面接時）
〔担当　長谷川〕

1）主訴　登校拒否

2）問題の発生と経過

両親と母方祖母，4人きょうだいの長女である咲子は小さい時から身体が弱く，風邪をひいてはしばしば学校を休んだ。外で友達と遊ぶこともなかった。おとなしくて，先生の評判も「まじめな子」であった。また，勉強面ではかなりの頑張り屋で反抗期はなかった。

中学に入って，秋頃までは週に一回程度のペースで欠席した。休む前の夜は，宿題もして登校する準備をするが，翌朝「気持ちが悪い」と訴え，登校できないが，昼には元気になる。12月頃からほぼ2日に一度のペースで欠席するようになった。母親が問うと，「学校も，部活（陸上）も楽しい」と答える。母親は最初は半強制的に登校させたものの，ふと「これが登校拒否というものか」と思うようになり，専門書を読んで勉強し，以降登校刺激を与えないようにした。そうすると，咲子の身体的訴えはなくなった。成績はずっとトップであったのが，中位に下がっていった。初会面接時は，登校拒否を続けていたが，学校の事は気にしているようで，しばしば友人宅に電話をして学校のことを聞いている。夜遅く床に就

---

* 本報告の概要は，日本教育心理学会第30回総会（1988）において発表された。

1）名古屋大学大学院教育学研究科研究生
2）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）（現所属　東海女子大学文学部）
3）トライデント カレッジ（元名古屋大学教育学部心理教育相談室）
4）名古屋大学教育学部研究生
5）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）
6）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期課程）

き，昼近くに起床するという生活である。母親は，本人の自主性に任せようという気持ちはあるものの，確信が持てず，不安の状態で来談した。

3）家族構成と特徴

父：大学卒，44歳。父親の経営していた会社の後継ぎで，のんきでおおらかな性格。仕事が忙しく，子供と接する機会が少なく，夕食もほとんど一緒にとらない。自らも「子供とのつきあいかたがわからない」と言った。

母：大学卒で40歳。細かいことが気になり，子供に干渉的であり，いらいらして子供にあたり，小さいうちから道理を言って聞かせた。また，夫の会社の手伝いで外出していることが多い。

祖母：子供に過保護過干渉で細かいことが大変気になり，子供のことをいつも注意している，母親に似た性格。

4）初回面接時の所見

学校に行きたいけど行けないという，いわゆる神経症的登校拒否の典型例である。過保護過干渉な母親と祖母の二人の養育者の下で，主体性の発達が未熟であると考えられる。しかし，より重要に思われるのは，母親は子供としての本児に接するのでなく，小さい時から大人に対するかのように道理を言って聞かせてきた点である。この家庭は知的雰囲気を漂わせている。同時に，母親の母性的，情緒的側面が発揮されていない。そのような中で，本児は子供らしい振る舞いを抑圧し理性的な大人の役割を演じ，男性原理で生きていくこととなった。父親は本児とのかかわりが希薄で，適切な父親像を提供するに至っていない。

母親面接では，本児に対して適切な母性役割がとれず，大人としての理性を求めねばならなかった母親の内面に光をあてたカウンセリングを実施し，真の母娘関係の再統合をめざす。それを通じ，本児が子供として自由な行動表現をし，女の子としての成長の過程が進むことが目標とされた。

5）治療経過

面接開始後の咲子の様子として，新年度になったこともあり（咲子2年生），担任教師や母親は登校させようと働きかけ，咲子も「学校に行きたい」と言いながら，登校の努力はするものの，やはり身体の調子が悪くなって，休む日が多かった。しかし，毎日宿題はし，咲子自身は「自分で立ち直れる」と言っていた。そのため母親はかなり焦りを感じており，まだ子供の咲子に対しても，道理を説いて聞かし，ほとんど大人に対する接し方であった。

面接を重ねるうちに，母親の洞察は進み，咲子が子供から大人になる過程で親介入は好ましいものではないということを理解し，それを実践する努力がみられるようになった。具体的には自主性に任せると同時に，基本的に咲子の話をよく聞いてやるという姿勢がよく現われていた。

しかし，咲子は全く学校へ行かなくなった。

5月頃になって，母親に肩もみを要求するといった身体接触（退行）がみられ，これを母親は受け入れ，また，学校側も相談室に協力的であり，「相談室の指示に何でも従ってください」という姿勢となり，父親も「徹底してやれ」と母親を支え，両親で幾度か「まず親が努力して変わらねばならない」と話しあった。このように全ての環境が咲子の自立にとって好ましいように思われたが，咲子の生活は自由な雰囲気の中で昼夜逆転となり，学習塾も休むようになった。来談については，「私は何も相談することはない」と話し，傍から見ていると，何も困ったことはない，という様子である。6月になると，努力して朝起きるようになり，家の手伝い（料理など）もするようになった。また，ポップスの人気グループ（アハ）の歌を大変好きになり，学校については「留年は絶対いやだ」と主張した。

夏になり，咲子は母親と一緒に服を買いに行き，ストライプのスカート，ノースリーブのセーター，白いブラウスを買って来る。母親は咲子がとてもおしゃれなのに驚いたという。また，「身体がこる」とか「肩をもんで」という母親への身体接触要求は言わなくなり，ミケランジェロやラファエロといった古い宗教画に関心を示すようになった。

夏休みには，沢山本を読んだり，自らギター教室に通ったり，学校の友達が何度か訪れたりして，咲子も楽しそうであった。そうした彼女に対して親戚のひとりが咲子のことを「春休みはボーっとしていたけど，今は元気あるわね」と言った。学校は2学期から登校をという意向で働きかけてきたが，母親は「もう少し時間をください」と依頼した。夏休み最後の日，家族揃ってプールへ遊びに行った。

新学期になり，咲子は「学校に行きたいんだよ」というものの登校はできない。両親は「あわてなくていいんだよ」という姿勢である。友人には，「私，勉強わからないから行けない」と伝えた。両親は家庭教師の依頼を考えたが，本人が言い出すまで待とうと決めていた。しかし，弟に「お姉ちゃん，そろそろ行けよ」と登校を促されたあと，咲子は弟の机を散らかした。この頃から，外でスケートボードの練習をするようになり，ギターのレッスンは続けている。母親はほとんど毎回，わかっているがなかなか回復しないつらさから，治療者の前で涙するということが続いていた。

秋になって，留年の問題を前にして，咲子も学校の事を考えざるを得なくなったのか，「絶対3年生になる。3学期になる前に行く」と言っていた。それでも，家の中では明るく，兄弟とも楽しくやっており，母親が「行きたいのだったら手伝うよ」と言うものの，「自分で何とかするからいいわ」と答える。また，学校の友人と「交換漫画」をはじめ，髪の毛を長く伸ばしストレートにし，こまめにシャンプーをしている。11月になり，アハの影響か，ノルウェー語に興味を示し，本を買ってきて勉強を始めた。担任から治療者に電話があり，「何をしたらいいか教えて下さい」という質問に，「登校させるということとは別に，咲子との繋がりを保つことが大切になるのでは」と伝えた。その後，担任は咲子宅を訪れ，咲子と二人で話をしていった。3学期が始まり，始業式の前日，咲子は制服などを出して準備はしたが，「やっぱり，少し勉強取り戻してからにするわ」と言い，結局登校はできなかった。そんな咲子に，母親が「家庭教師の先生頼もうか」という誘いかけをし，咲子は「うん，頼む」と同調する。その少し前頃より編み物を始め，バレンタインデーにマフラーを男の子にプレゼントするとのことであった。母親は初めて男の子の事を語った咲子に驚きを感じ，「もう，そんな年ごろなんだなあ」と，しみじみ考えたという。髪の毛の手入れをしたり，おしゃれをしたり，その背景に異性に対する意識の芽生えがあったのだろうかと考えたという。2月に入って，自ら1，2年生のテキストを出してきて，英語の勉強をするようになった。この頃，咲子は「夜は絶対行こうと思うんだけど，朝になると行けなくなっちゃう」と，より言語化できるようになっていた。母親の強い依頼もあって治療者は咲子の家庭教師として，臨床心理学を志している大学4年の女子学生を紹介した。咲子の希望で，英語は自分でやり，数学を家庭教師にみてもらうことになった。家庭教師とは勉強だけでなく“おしゃべり”の時間もかなり持った。

家庭教師との勉強を2回した後，2月8日に突然自ら起床し登校した。その日は最後の授業まで参加し，翌日からはクラブ活動にも参加するようになった。咲子は，学校のことを楽しげに語り，家族の喜びもひとしおであった。しばらく登校した後，風邪をひき欠席することもあったが，ほぼ毎日登校した。3月の試験には，かなり熱をいれて勉強し全て受験したが，その後ひどく疲労して高熱を出して休みが続いた。しかし，回復後は登校を再開し試験の結果も中位とまずまずの成績であった。

3年に進級した後は欠席することもなく，家庭教師との良好な関係も続いている。

6）考　察

（1）子供らしさ；当初は自分が学校へ行けないことについて，あたかも“なにごともない”かのように冷静な態度しか示さなかった。母親の問いかけに対しても，「別に」と曖昧な返答を繰り返すのみであった。内面の苦しみを決して他者に示すことはなかった。しかし，母親面接が進行し登校再開に先立って，家族の前で「本当は行きたいんだよーっ」と何度も泣き叫ぶということがあった。体裁を考えず自己の内面を曝け出した貴重な体験であったといえる。今まで抑圧されてきた子供の側面である。

（2）女の子らしさ；子供らしさの露呈とほぼ並行して，女の子としての意識の萌芽が観察された。以前は頑張り屋という男性原理で生きてきた本児が，治療の進行とともに，衣服に関心を持ち，髪の手入れをする，好きな男の子を意識する，男の子に気持ちを伝えようとマフラーを編む，といった行動が出現した。これらが普遍的な女性性の表出かどうかという問題はさておいて，現代の日本社会においては女性役割行動の一貫であると考えてよいであろう。ここから，これまで競争社会（男性社会）に合致させ眠らさせてきた内面の女性側面の覚醒（転換）が進行していたのではないかと推察される。

（3）家庭教師について；登校再開の直前に，治療的家庭教師として女子学生が派遣された。この時点では既に本児の中に登校へ向けての動きがあったのであろうが，その行動化の引き金としての役割は無視できない。同性の年上の人物とのかかわりは，本児のように同一性の問題を抱えた子どもにとって重要となることが多い。本児はこの家庭教師との交流の中で，女性としての先輩に関心を持ち，いろいろな質問を発している。それはこの人物への同一化の表われとみてよい。

2．事例2：真理子　16歳　二度目の高1（受理面接時）
〔担当　加藤，桐山〕

1）主訴　登校拒否

2）家族構成と特徴

父親（42歳）はこちらから話しかけないと話さない無口な人で，サラ金が原因で5年程ゴタゴタした後，真理子が中1のときに真理子の母親である妻とは離婚している。妻に内緒で借りたサラ金のことが公になっても，一切非を認めず，知らん顔をして通したという。妻にいわせると，責任感のない人である。真理子は両親の離婚について，「父は朝早く出て行き，夜遅く帰って来るので，ほとんど接触なし，私にとっては居ても居なくてもどうということのない存在だった。離婚に際しても，特に感慨なし，母親が明るくなってかえってよかったと思う」と大変クールに受けとめており，真理子にとって，父親

はかなり心理的に距離のある存在であった。また，後の面接経過の中で，真理子は父のように背が高くてガッチリしたスポーツマンタイプの男性は気持ちが悪いと父親へのネガティブ感情を明確に言語化してもいる。

母親（42歳）は非常に生真面目で曲がったことが嫌いな性格で，夫と離婚直前より保険のセールスマンを始めるが，水を得た魚のようにキャリアウーマンとしてバリバリと仕事をこなし，今では中間管理的な立場で夜遅くまで若い子の指導にあたっている。真理子のことを一応心配しているが，生活の糧を得るために，まずは仕事優先といったところが見受けられた。治療者の受ける印象からしても，母親というよりキャリアウーマンと称した方がしっくりしている。

弟は内向的で姉弟げんかは日常茶飯時であるが，それでも姉の言うことは結構聞いているようである。母に対しては従順で，ストレートに甘えを表現することができ，母の方も弟は可愛がっている。

母方祖父は大変厳格な人で，真理子の症状は全く理解できず，真理子の居ないところで母に対してグチュグチュと「あんたの育てかたが悪い」と文句を言う。

母方祖母は祖父とは正反対であっけらかんとした人のいい，世話好きな人で，母に代わって食事のこと一切をしてくれる。また，趣味も多く，夕方からおけいこに出掛けて行くこともしばしばである。

初会面接時の真理子はきれいにカットされたショートヘアにピンクのワンピースと黒のタイツといった格好をしており，治療者である加藤は真理子に対し，高校２年生にしては少し幼く，素直で明るく，スレていない印象を持った。最初から比較的打ち解けて真理子の内面に潜む問題についても話を進める事ができたが，あまりにもサラッと事もなげに様々な問題を語る真理子であり，かなり様々の感情を抑圧しているようにも感じられた。

３）初回面接時の所見

両親の葛藤，離婚といった大きな出来事をサラリと過ごしてきた真理子である。内的生活をなおざりにすることによって，厳しい現実から逃れてきている。そのため，常に良い子で成績優秀，明るくて申し分なしといった外的生活に比べて，真理子の内的生活はこれまで生かされてきていない。自分の内面に目を向け，育てることによって，外面と内面のバランスをとることが真理子の今後の課題と考えた。

４）問題の経過と治療過程

小さい頃から，人当たりがよく愛想のよい子どもで，母親以上に周囲の大人達（特に祖父母）に可愛がられた。小・中学校時代は，常に良い子で，成績優秀，明るく申し分のない真理子であった。キリスト教系の幼稚園に通っていた際，洗礼を受けたこともあって，他人に迷惑をかけないことを信条とし，友達からの人望も厚く，真理子が特に望まなくても，いつも彼女の周囲には友人達が集まり，そのリーダー的な存在だった。

真理子が中学１年の時，サラ金が原因で父母の離婚という大きな出来事に遭遇するが，特に衝撃を受けた様子もなく「お父さんは，居ても居なくても同じ。お母さんが明るくなってよかった」と，サラリと言ってのける真理子だった。それ以後，母方の祖父母のもとに，母親・真理子・弟の３人で移り住み，母親は生活の糧を得るために働き始めることになった。水を得た魚のように，母親はその能力を仕事に発揮し，真理子にとって母親は，家庭内で育児や家事に従事する母親から，外で男性と対等に仕事をこなすキャリアウーマンとして存在するようになり，家事は祖母にまかせ，家では緊張感から解き放され，全くだらしのない母親を目の当たりにし，女性としては同一視しにくい対象となっていった。

公立の進学高校入学後は，体調が悪く，朝起きられない日が続き，加えて規則が厳しく，自分には合わない学校との思いも強く，夏休み以後欠席が目立った。学年末に出席日数が不足し，中学校の先生に相談した結果，私立の女子高校へ再入学という運びに至った。再入学後，１，２学期は特に問題なく登校するが，２学期の期末テストを全て欠席し，３学期は20日間連続欠席をし，その後もさみだれ的に登校，欠席を繰り返した。

面接開始当初の真理子は，ショートヘアーにミニのワンピースがよく似合う少女のような初々しさを漂わせていた。母親とは価値感が違うと反発しながらも，母親の一挙手一投足を気にして，キャリアウーマンとしてバリバリ働いている母親を理想の女性として捉え，母親のように生き生きとしていない今の自分をかんじていた。春休みの補習を何とか乗り切り，２年生に進級するが，相変らず登校・欠席を繰り返す状態が続き，なんとなくボーッとしている時間がふえた。

夏休みを前に真理子は自らの手で髪を脱色し，一足飛びに大人の女性への変身を試み，周囲を大いに驚かせたが，真理子は「自分では予想外にうまくいった。このような冒険もたまにはいいのではないか」とまんざらでもなさそうであった。

夏休みには，母親の紹介でアルバイトをして過ごした。仕事をすることの充実感を味わうとともに，そこでは，妊娠中で母親になる喜びに浸っている人，嫁姑関係に悩む人，保母や教師を目ざして勉強している人など，様々な生き方をしている女性に出会い，真理子にとっては貴重な体験となった。

２学期に入り，休学の道を選んだ真理子は，気分的に

楽になったようで，家の中で様々なことをはじめた。以前は弟よりも家事に携わっていなかった真理子であったが，祖母に代わって家事の一切を引き受け，自ら「主婦のプロ」と称して，かなり本格的なお菓子作りや洋裁，編み物に励んだ。真理子はそれらについて，「自分の性分に合っている」ととても楽しそうで，無理のない様子であった。この頃の真理子はモスグリーンのシックな洋服を着こなし，指先には白く光るマニキュアが光り，美しい大人の女性の雰囲気を漂わせるようになっていた。

冬になると，体力作りとスマートな体型を維持していくために，なわとび，ストレッチを毎日欠かさず行なった。

3月に入り，新年度を前にして真理子は，「この1年，休んで本当によかったと思う。やりたいことがやれて，充分エネルギーを補給することができ，満足している。今年は大丈夫だと思う。高校だけは出ておきたい」と明るい表情で力強く語った。母親に対しては，「やっぱり理想の女性像。お母さんのようになりたいとは思うがそっくりだったら気持ち悪い」と女性としての母親の良さを認めつつも，自分は自分の道を歩んでいこうという姿勢を示した。最終面接時には，治療者に手作りのクッキーと化粧ポーチをプレゼントして去って行った。6月半ばに，明るい声で学校とアルバイトを無理のないペースで頑張っている旨の電話情報が入った。

5）考　察

はじめに母親との関係からみることにする。真理子は自らさほど努力しなくても優等生で常にクラスのリーダー的存在であり，女性であることをことさら意識する必要のない小・中学生のころから，母親を同一視の対象にしているが，自分はそうはなれないと実感している。つまり，母親は男性社会で力を発揮しているキャリアウーマンであり女性としては同一視しにくい存在であったと考えられる。また，生き生きしていた昔の自分と比較し，今の自分は生き生きしておらず，生活実感の希薄さを実感しているようである。その背景として，自分の思っていたような学校でなかった，友だちがあまりできなかったというはじめの高校とレベルが低く，自分より年下の同級生であった二度目の高校の学校生活の状況があり，真理子にとって登校拒否は優劣感情・自尊心が傷付く事を恐れ，戦いの場である学校から撤退という意味合いが感じられた。

父親との関係に目を移すと，真理子は父親に可愛がられ，愛された経験を持たず，そのことが，異性を愛情対象としてみることができず，男性を異性として認められないのであり，恋愛関係がなかなか発展していかないと考えられる。すなわち，自分自身の女性性も育たないことになり，女性性受容も困難なのである。

真理子は対社会的には女らしく，明るく，素直に振舞いながらも，これは本当の姿ではないと違和感を感じ，二重人格ではないかと危具していたのである。社会的自己像と主観的自己像が不統合で，本当の自分の姿が見えず混乱している真理子にとって自己統合，すなわち人形やお菓子作り，保母さんや先生，主婦との話に耳を傾けることで，女性性を受容していくことが立ち直り，すなわち登校再開のきっかけになったと示唆された。

3．事例3：恵梨華　17歳　高校2年生〔担当　池田〕

1）主訴　登校拒否，家出，自殺企図

2）問題の発生

高2の4月から風邪をきっかけに休みがちとなり，連休明けからは全く行かないで横臥の状態を呈し，親が強く叱責したところ，家出し徘徊する。希死念慮があり，高台にある家の窓から飛び降りようとしたり，リスト・カッティングをしたりする。また，不眠，易刺激的で焦燥感が強く，不安定で泣いてばかりおり，退行的で児戯的，母親に極端に甘える。

3）家族構成

父親（58歳）は保険の代理店を経営しており，仕事はやり手で難問題の処理を得意とする「こわもて」タイプである。恵梨華の母親とは再婚で，先妻との間に二人の子供がある。性格は頑迷で怒りっぽく，相手に完璧を求め，思い通りに支配しようとする。そのため，彼が育てた先妻との間の既に成人した二人の子供とも断絶し，音信不通となっている。後の経過の中で，実は内心いまだ，やむなき事情で別れることになった先妻への未練を残していることが明らかになっていった。

母親（52歳）は高校を卒業後，事務の仕事をしていたが，結核療養のため結婚が遅れた。父親と結婚したのは，30歳の時で，先妻の子は当時，長男が小5，長女が小2で，当初は経済的に苦しく，彼女は美容院に勤めたり，内職に励んだりの生活だった。夫はワンマンで専制的，決して家庭的でなく，仕事に出ると色々な付き合いでほとんど午前様だった。母親はくよくよと取り越し苦労して悩むタイプで，自分中心ですぐ怒るという夫の性格から，夫婦間での争いが絶えなかった。夫との「心理的結婚」が成立しなかったことから，恵梨華はこの母親から溺愛して育てられることになる。実際，母親は彼女を先妻の子たちとかなり差別して育てたという。

4）生活歴

父親40歳，母親32歳の時，恵梨華は誕生し，発育は順調で，幼少期は利発で活発，何でも早い方だった。母親は自分に似合わないよくできた子供だと思ったという。

兄や姉は随分かわいがってくれた。5歳の時に，交通事故で母親が1カ月入院し，その間，恵梨華は母親の実家に預けられた。この頃，小児結核で1年間通院し，小学校時代は病弱で学校をよく休んだ。中学になると，小学校での長欠がひびいて，成績はあまりよいものではなかった。塾に行かせても家庭教師を付けても成績は上がらず，公立高校の受験には失敗した。

高校では，1年の時，1週間ずつ2回程不登校があって，この頃から母親は登校拒否であることに気付いたという。2年になる時，進学クラスに入れるかどうかの不安があったが，それには入ることができた。しかし，「みんな，勉強が出来るからきついわ」といっていた。また，「みんなにはボーイ・フレンドがいるけど，私にはいないから，それも駄目だ」とも述べていたという。

5）治療経過

これは精神科病院でのケースである。はじめ，ごく短期間の入院をさせたが，退院後も基本的には入院前の状態とかわらず，退行的に母親にまとわりついたり，犬の真似をしたり，不安が高く，易刺激的で「淋しい，淋しい。友だちに取り残される」といって，泣いたりイライラしたり，無気力で何もしなかったりした。定期的に母親と一緒に来院したが，話題は極めて表層的で拒否的でさえある。ネガティヴな父親イメージの転移というよりは，自分でも問題を明確化し意識化出来ないため，何も話すことがなくて面接自体が苦痛そうな感じであった。そのため，母親面接を中心に継続することにし，本人には気の向いた時に顔を見せてもらうことにした。7月には休学，留年の決心をして，アルバイトを希望し，レストランのウェイトレスのアルバイトに行くようになる。始めのうちは行ったり休んだりであったが，次第に明るくなり，よく話すようになった。言葉使いや挨拶の仕方を教えられ，いい社会的経験を積んだようであった。その後，「アメリカに行って，ホーム・ステイしたい」「親元を離れたい」などといって親ともめたり，睡眠薬による自殺企図をしたり，精神状態は時々揺れ動いて不安定になったり荒れたりもしたが，バイト先の友だちと付き合い，映画や買い物に一緒に行ったり，ペンパルのところへ旅行したり，バイト先の男の子を好きになって，片思いのまま，失恋したりもするようになる。バイト後も「二次会」と称して，帰宅は非常に遅くなり，ボーイ・フレンドができて，恵梨華はその付き合いに夢中になる。親はおろおろし，心配し不安になり，その付き合いに反対したが，こうした問題を通して，両親の間の心理的距離は縮まっていった。

新年度から恵梨華は復学したが，父親の強い反対でやめていたボーイ・フレンドとのつきあいは，実は密かに続いていて，5月半ばのある日，二人はしめしあわせて家出することになる。一泊の短い駆け落ちの真似，未熟な逃避行であった。しかし，この交際は結局はうまくいかなかった。恵梨華自身アンビバレントであったし，二人ともその関係を成就させるまでには成熟していなかった。この家出は性急で無謀な行動化ではあったが，成熟へのひとつの試行錯誤としての意味を見い出すことはできる。実際，この頃の恵梨華は非常に女っぽくなって，異性を意識する目の輝きと身のこなしがあった。最初に来た時の柄ばかり大きくて，幼稚で無愛想な高校生という感じからはほど遠く美しくなっていた。ここでも，女らしくなること，女性性の内的受容ということと登校拒否状態の改善との間に対応のあることが見い出される。

4．事例4：美代　12歳　小学6年生　〔担当　東浦〕

1）主訴　登校拒否

2）問題の発生

幼少期より手のかからないおとなしい子であったが，父親の転勤で小学校3年時にS県よりA県に転校し，小学校4年の2学期に仲良しのグループの子たちに仲間外れにあい，「いじめられる」という理由で3日間欠席する。また，友人と万引きをし，小学5年になり，万引きのことが担任に発覚して注意を受け，3日間欠席をする。11月に宿題のノートの貸し借りで友人とトラブルとなり，休み始める。そして，6年生の6月より完全に登校しなくなった。

美代の母親がI市の家庭児童相談室の「登校拒否児を持つ親のグループ・カウンセリング」に参加し，子供への直接のかかわりは行なわれなかったが，美代を相談室に呼び，かかわることを目的に，母親が来談した8カ月後の10月より家庭訪問を開始した。

不登校の様子は，登校時になると頭痛を訴え，自室に籠もり，登校時が過ぎると平常になり，母親がカウンセリングに通う頃はテレビを見て，編み物をして時を過ごしていた。平日は外に出ないが，日曜日には友だちと外で遊び，エレクトーン教室には熱心に通っている。家では手伝いもし，手芸，俳句作り，粘土細工，水彩などが好きである。

3）家族構成と特徴

父親は51歳で会社員，転勤後は仕事が忙しく，帰宅時間も遅い。休日もないことがあるが，休みの合間を貫って美代と二人で釣りに行く。

母は45歳で主婦。相手に気を使い過ぎ，優柔不断になってしまうタイプだが，芯は強く，淡白な印象を受ける。美代に対しては考えすぎて自然に接することができない。

祖母は大阪に住んでいるが，月に1週間ほどI市に用

もあり，泊まりに来る。美代のことをとても心配し気付かい，美代も慕っている。

姉は21歳で短大２年生。美代とは同室だが，接触は少ない。

兄は17歳で高校３年生。映画が好きでホラー映画などを美代に見せる。しかし，自室に籠もることも多く，実質的には接触は少ない。

４）初回面接時の所見

美代の印象はやや小柄で切れ長の幅の広い目をした可愛い子で，無口でとてもおとなしい。しかし，祖母や母親に対してははっきりした口調で言う。

５）経　過

治療者は面接室での面接ではなく，家庭訪問により，週１回60分から90分，美代の家で好きなテレビやマンガ，歌手などについての雑談を交えながら彼女がやりたいというブローチ作り，お手玉作り，粘土の人形作りなどをした。美代の一番好きなことは粘土であった。初めのうちは，粘土でブローチを作り，それに絵を描くことを好んでやっていた。

治療者は美代と粘土細工を一緒にしたり，雑談を共有したりする「お姉さん」として美代にかかわった。

２月に入り，18回より，粘土のブローチ作りが赤ちゃんや動物の人形作りに変わった。そして美代と治療者それぞれ作った人形をじゃれ合わせたり，一緒に体操させたりという人形劇風のことをするようになった。

治療者とは一貫して，女の子らしいことをしていたが，美代は手芸などの女の子らしいことよりも父親と魚釣りに行くこと，ジェットコースターに乗ること，ローラースケートをすることなど活動的で少年っぽいことを好んでいた。そういうこともあってか，美代から受ける印象には中性的なものがあった。

中学入学の時期を迎え，まわりの強い期待，本人の強い希望もあって，４月から登校し始め，その時点で家庭訪問も終了となった。しかし，１カ月で再び登校拒否になり，母親からの電話があり，美代が治療者に「勉強を見てもらいたい」と言っていると伝えられ，６月より再び会うことになった。

６）考　察

美代は相談室に来ることに抵抗があったため，治療者自身も小さな保育園の教室のようなところでの面接に抵抗があり，家庭訪問という形で週に１度，１時間，美代と二人で会うことにした。

美代はその印象からも中性的で，子供から女の子になる途上にある感じであり，その発達段階をひとつクリヤーするところでつまずき，迷っているのではないかと思われた。家庭訪問という形式で美代と会い，確固たる枠組みが作れず，治療者も距離をおいてしまうところがあり，中途半端なかかわり方しかできなかった。一度は登校できたものの，１カ月で再び行かれなくなったのは，まわりの期待や美代自身の期待がおおきかったからであろうか。

治療者は彼女がその絵の中に自己のイメージ，願望，治療者イメージなどを表現しているように感じられ，ブローチを一緒に作るということは意味があると思っていた。また，マンガやテレビについての何気ない雑談から彼女が美しく変身するマンガの主人公や他人を救い自分を幸せにする超能力や魔法を持つことへのあこがれを抱いていること，あるいは学校に対する不信感をもっていること，また，対人関係の中で傷付いていることなどを治療者は感じることができた。また，粘土細工は母親が以前に少しやっていたものであり，本当は母親と一緒に作りたいと思っているのだが母親は美代にどう接していいのかわからず距離を置いていて，美代も素直に言い出せないようなところがあった。美代の問題は母親に甘え，受け入れられ，女の子として育まれるという体験が少ないまま思春期を迎えたというところあたりにあるように思われた。それまでブローチという平面として表現されていたものが，人形という立体的な形を伴ったものになり，赤ちゃんのように退行して甘えているかと思われ，６月以降，家庭教師として再度かかわる際，勉強だけでなく，美代の好きな漫画や手芸など彼女がしたいことのできる時間を保障することで，二人の空間を大切にし，そのことが自らを再統合していく足掛りとなると考える。

Ⅲ．総合的考察

事例１（咲子）と事例３（恵梨華）は母親面接を通して，事例２（真理子）と事例４（美代）は本人との面接（事例４は家庭訪問という形態である。）継続女性性の内的受容に焦点を当てること，つまり，女らしくなることが登校拒否という状態や症状の改善や治療経過の転換点となっていると考える。

ここでいう「女性性」あるいは「女らしさ」は，若林・伊藤（1985）が述べているように生物学的・生理的・身体の機能や構造的によるものもひとつであろうが，むしろ，社会・文化・慣習や個人をとりかこむ，母親や父親を始めとする人の価値感の働きかけをさす。

この「女らしさ」の働きかけは発達の視点から見ていくと，赤ちゃん誕生からはじまっており，産着や蒲団は赤やピンク，乳幼児の洋服はやはり赤系のもので，リボンやフリルの付いたものを着るようになる。さらに，幼稚園に通い始め，就学前後には，「女の子だから～しては

いけません」「女の子だから～しなさい」という「しつけ」が厳しくなり，いわゆる「社会化」(socialization) が行なわれる。そして，しつけを受け入れることで誉められ，受け入れないことで叱られるといった賞罰をともなうものの他に，「模倣」（imitation）や「モデリング」(modeling) というのも社会化に働きかけるのである。例えば，女の子が母親の仕草や言葉使いを真似てみたり，童話やアニメーションの主人公に同一化するのである。そして，その後，自分自身が自らの認知および価値判断で自己の「性」として取り入れ，受け入れていくようになる。

児童期後期，いわゆる思春期に入り，第２次性徴期と相伴って初潮をはじめとして種々な身体的変化がいやおうなしに訪れてくる。ここで今までにまして，前述した初潮に代表されるような自己の内からうちよせて来る「女であること」と社会から期待され，要請される女性としての役割，つまり，自己の外からの「女らしさ」の両方を受容していくことがこの時期の女子青年に求められるのである。

登校拒否の舞台である「学校」に目を移してみたい。

幼稚園から小学校に上がり，そこでの教育は学籍簿や席順にはじまり，学習内容までもが男女の区別である性別化を強化している。また，対人関係においても，ギャング・エイジさらに年齢が進めば，H. S. サリヴァンのいうチャムシップといった同性の仲間集団とかかわり，仲間として認めてもらい，うまくつきあっていく中で，さらに女らしさを身につけていくことになるのである。

しかし，中学・高校はどうであろうか。教育カリキュラムを見ると，女子においては男子と異なり，体育の授業が減ったり家庭科にしても料理や裁縫といった性別化が行なわれているにせよ，クラスや行事のリーダーは男子が多く，成績も女子が男子に押されてきだす。つまり，この時期になると小学校に比べて，学校生活においても学業においても男子中心の，あるいは男性優位の世界に生きることになるのである。

子供から大人への過渡期である思春期は自らの意志と判断によって言動がなされること，すなわち「自立」がその発達課題となってくる。しかしながら，これら自立とは男性を念頭においたものであり，「一人立ち，独立心，活動的，目的達成への努力」など，いわゆる理想的男性性や男性役割に結びつくのである。女性にとってそれまで教育され，しつけられてきた「素直で従順，依存的，控え目」といったものとはむしろ反対なのであり，自立とは逆なのである。

唯，救いであろうことは，そうした受動的，依存的，順応的である女性的役割行動は常に主体的，能動的を期待される男子に比べ社会には受け入れられ易いことである。

思春期における女子が自立しようとする際に自己の内面に目をむけると，そこにはそれまで自分が受け入れてきた「女性性」が存在しており，正にそれがこれから生きて行こうとする自立には邪魔になり，混乱をし，内在化された自己と学校に代表される社会との板挟みとなるのである。

したがって，この混乱状態を解きほぐし，「女性としての自分」を思慮し，受け入れていくことが，そしてその援助を面接の中ですることが自己のイメージの安定に繋がると考えた。

具体的内容とアプローチについては４つの事例を通して，３つの観点からみていくことにする。

（１）生育史・生活史について

事例１の咲子は「おとなしく，真面目で，反抗期もなく，頑張り屋」であり，事例２の真理子は「小さい頃から人当たりがよく，小・中学校時代は常に良い子」である。また，事例４の美代も「幼少期よりおとなしい手のかからない子」であり，前述したように，彼女らが登校拒否を起こす前の状況は総じて「良い子」であり，それは両親の言い付けをよく守り，従順でいつもニコニコしている女の子として捉えられる。すなわち，両親や教師といった回りの人に「おとなしく良い子であること」＝「女の子としての受け入れ」に繋がるのであり，その繋がりに疑問を感じた時に登校拒否の徴候が現われ出したと考えられる。

（２）生活の中での変化

前述したように女性（女の子）らしさの社会化の方法のひとつに外から，つまり，外見的な自分を変化させていくことが考えられる。

事例１の咲子は「家の手伝い（料理など）」をするようになり，「母親と一緒にストライプのスカート，ノースリーブのセーター，白いブラウスを買う」さらに，「占い宗教画に感心」を示し，「ギター教室」に通いだす。そして，「髪の毛を長く伸ばしてストレートにし，こまめにシャンプー」をしているのである。事例２の真理子も「祖母に代わって家事一切を引き受け，自ら『主婦のプロ』と称して，かなり本格的なお菓子作りや洋裁，編み物」をし，服装も「ショートヘアーにピンクのミニのワンピース」から「自らの手で髪を脱色」し，「モスグリーンのシックな洋服を着こなし，指先にはマニュキアが光る」大人の女性に変身したのである。事例３の恵梨華にしてみても「柄は大きいけども，幼稚で無愛想な高校生という感じ」から「非常に女っぽくなって，異

性を意識する目の輝きと身のこなし」に変わっていったのである。事例4の美代は先の3事例より年齢的に低いためか外見的な変化は未だみられないが，「ローラースケート，紙飛行機」といった少年的な遊びから「ブローチ作り，お手玉作り，粘土細工」といった女の子っぽい遊びへと移っていった。

こうした変化は，子供から大人へ，中性から女性へ，女の子から女への移り代わりであり，「外」を変えることで女性であることの「内」を基礎固めしているように感じる。

（3）対人関係・人間関係について

第一に友人関係について考察すると，事例1の咲子では，「(小さい頃から体が弱かったために）外で友だちと遊ぶこともなかった」のが「学校の友だちが何度か来てくれる」ようになり，さらに「学校の友だちと交換漫画を始める」さらに，「男の子にマフラーを贈ろうとする」のである。事例3の恵梨華は「アルバイトを通してボーイ・フレンドと付き合い」をはじめたり，「バイト先の友だちとの映画や買い物」「ペンパルのところへ旅行」をする。

治療経過の中での友人関係の移りかわりについては，われわれの第Ⅱ報の中でかかわりの在り方を「タテ関係からヨコ関係」という視点から述べているので詳細はそちらに譲るとするが，発達的にも幼少期・児童期の友人関係になんらかの問題の存在が見出され，あるいは推測され，治療が進むにつれ，一方方向のかかわりから双方方向のそれに変化がみられる。しかも，咲子は「男の子にマフラー」を，恵梨華は「ボーイ・フレンドとデートや家出」といった異性が登場することで，自ら「女であること」，換言すれば自己内の女性性を意識し，女性としての性的魅力を再確認するのであろう。

第2に，家庭内の特に母親との関係をみてみると，事例1の咲子の母親は当初「道理を説いて聞かし，ほとんど大人に対する接し方」であったのが，「自主性に任せると同時に，基本的に咲子の話をよくきいてやるという姿勢」に変っており，母親に対身体接触，退行がみられる。事例2の真理子の母親は真理子が中1時に離婚し，そのため「男性と対等に仕事をこなすキャリア・ウーマンとしての存在となり，女性として同一視しにくい対象」であったのが真理子は「母親とは価値感が違うと反発しながらも，母親を理想の女性」「理想の女性像，お母さんのようになりたいと思うが，そっくりは気持ち悪い」と変化している。

このように母子関係が支配―服従・依存から母親が子供を個としての人間として独立し，自立に導くような関係へ変わっていくなかで，真理子のように母親に同一視出来ていくことで，女性として一番身近な存在である「母」を受け入れていくことは経過の中でも重要なポイントになろう。

第3に，その他彼女等を取り巻く人々についてみると，事例1と4では「家庭教師」，事例2では「アルバイトを通して様々な生き方をしている女性たち」，事例3ではアルバイトの仲間」さらに，事例4での「エレクトーンの先生」，そして全体を通して「治療者」といった多くの人達がかかわっている。それらはアルバイトやエレクトーンという媒介物が関与してもいるが，社会との繋がり，つまり，自己の内と外とのパイプ役を演じていると考えられる。事例2の真理子は母親に同一視したのに対して，事例1の咲子と事例4の美代は母親よりも年齢が近い家庭教師（事例4では治療者でもある）に，事例3の恵梨華はさらに年齢的に身近なアルバイト仲間への同一化やボーイフレンドとの交際によって女性としての生き方や在り方をそれぞれに獲得していったと思われる。

以上，結論的にいえば，登校拒否女子事例がみずからの与えられた性役割性を受容することと登校拒否の状態から立ち直り再び社会参加していくことができるようになることとの間には関連のあることが明らかとなった。それは，かつて池田（1979）が述べたように，この時期に性役割を獲得するという課題は一般に，男子にあってはもはや単に役割という社会的次元のことがらにとどまらず，身体的，心理的，実存的な自己の統合，いわば存在論的な identity 確立の問題に直結しているのに対し，女子の場合には，「自己愛的・社会的受容（被愛）欲求」と密接に結びついているため，ちょっとした女性的行動が周りの種々な次元の対人関係において受け入れられただけでも，比較的容易にこの課題が達成されうるし，同時にまた，それによって自尊感情を取り戻し社会の中に再参入していくことが可能になる，からであろう。さらに社会的次元自体に関しても，その要請の質や強度は両者の性において大きく相違している。基本的にいって，女性の場合，受動的，依存的，消極的であることも性役割期待としてはむしろ積極的に容認されるのに対し，男性の場合には不断に能動的，主体的であらねばならず，その当為としての要請は比べようもなく大きいのである。自己を確立して社会の中に出で立っていかなければならないという当為は，本質的に男性的な課題なのである。ここのところに男子の青年期危機がより深刻な様相を呈する理由が存している。

最後に，以上の結論から次のことが示唆される。すなわち，青年期女子登校拒否の，少なくともひとつの，治

療目標として，女性性の受容がつねに視野に入れられていなくてはならないということである。

文　　献

人見一彦　1988　女性の成長と心の悩み　創元社
池田博和・長谷川博一・平石賢二ほか　1987　登校拒否に関する研究　第Ⅰ報　――最近の来談者の諸傾向についての調査研究――　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**34**，255－291
池田博和・伊藤義美・江口昇勇　1979　臨床青年心理学研究（Ⅳ）――女子症例に関する諸報告――　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**26**，77－93
稲村　博編　1988　現代のエスプリ別冊　対談思春期の危険信号　至文堂
神保信一・山崎久美子編　1988　現代のエスプリ　**250**　学校に行けない子どもたち　至文堂
西平直喜　1988　思春期とはどういう時期か　青年心理　**70**　中学生　金子書房　pp.2－11
高木隆郎　1984　登校拒否と現代社会　児童青年精神医学とその近接領域　**25**，63－77
玉谷直実　1988　女性の心の成熟　創元社
若林　満・伊藤雅子編　1985　女性は自立する　福村出版
若林慎一郎・本城秀次・杉山登志郎ほか　1986　登校拒否の実態　社会精神医学　**9**，9－14

（1988年8月30日　受稿）

ABSTRACT

A Study on School Refusal (III)
– For Female Adolescents to Accept their Femininity as a Healing Moment of School Refusal –

Hirokazu IKEDA, Masayoshi ISHIKAWA, Hirokazu HASEGAWA,
Reiko KATO, Noriko TOURA, Kenji HIRAISHI, Masako KIRIYAMA,
Masahiro KAWASE and Masatsugu TSUJII

We should recognize a recent trend of school refusal that female adolescents are increasing. And it seems that symptoms of female school refusals are different from males. So that, we intended to clarify the specifics of female school refusals.

As a result of four case studies of girl school refusers, we found that their acceptance of own femininity corresponded to therapeutic turning point. That is, the femininity acceptance is a healing moment for girls.

Consequently, certain suggestion is given that it is always necessary to make them accept their femininity as a therapeutic aim of adolescent female school refusals.